

屋久島の山旅

工業3回生（S43年卒）渡辺 五郎

福島の阿武隈山地、磐越東線船引駅から郡山で新幹線に乗り換え、東京～新大阪を経て鹿児島中央駅、ここから指宿枕崎線の谷山駅まで1700km余り、10時間の乗車で駅に着くと鹿児島市内に住む鈴木泰正君が待っていた。泰正君の息子さんが運転する車で谷山港に送って貰い、午後6時出航の貨客船「ハイビスカス」、種子島経由で屋久島の宮之浦港に2日目の朝7時に着く。



貨客船ハイビスカスに乗船

船で泊れて格安の3900円なのだ。バスで安房の民宿に移動し午後からレンタカーを借り、世界遺産センター等を見学する。

福島を発ち3日目は最初に千尋の滝を見に行く。戻る途中に船で一緒だったオーストラリアから来た女の子が歩いて滝に向かっていたので彼女を載せて再び千尋の滝に行き、一緒に島を一周する事になった。昼食時に携帯で私の家族の写真や山スキーの動画を見せたら、イタリアに住む父親のBCスキーと雪山を登る写真を紹介して皆で盛り上がる。



千尋の滝、下の吊橋から

6月14日（晴れ）宮之浦岳

好天待ちの日が来た！タクシーで淀川登山口に向かい、4時45分から行動開始、暗いのでヘッドランプを使う。淀川小屋に着く頃にはすっかり明るくなり足の早い登山者に追い抜かれ始めるが、我々のペースで歩く。登山口の標高が1370M、宮之浦岳が1936Mなので標高差は僅だがアップダウンが多く時間がかかる。花之江河近くから見晴らしが良くなり黙々と歩き続ける。



花之江河、まだ先は長い！

葉の小さいヤクザサと花崗岩の岩を抱く周辺の黒味岳、投石岳、翁岳などの山々、開花したヤクシマシヤクナゲも姿を現し始めた。



黒味岳、山頂に立ちたかったが時間が無い



ヤクシマシャクナゲのアーチと宮之浦岳

宮之浦岳山頂 11 時着、泰正君と握手する。東側は雲海、狙い通りの晴れの空の下なのだ！

短い時間だったが山頂でアマチュア無線、薩摩半島さつま町の紫尾山と繋がる。



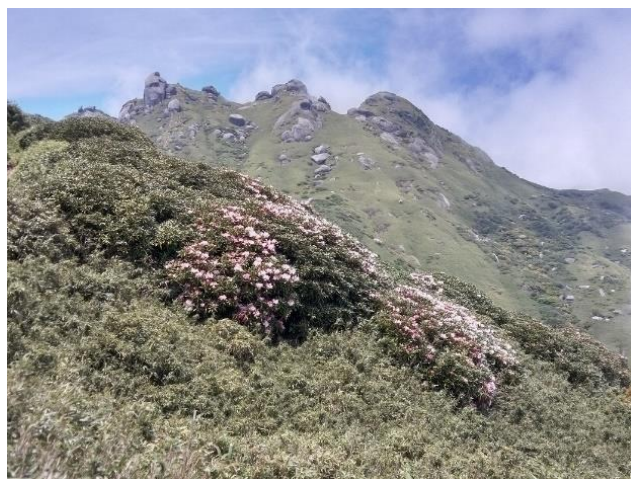
宮之浦岳山頂



宮之浦岳からの永田岳

30 分程山頂で滞在、焼野三叉路で荷物をデポして九州第二の高峰、永田岳を往復する。ヤクザサが広がる中

に満開状態のヤクシマシャクナゲ、永田岳を始め辺り花崗岩の岩峰とのバランスが素晴らしいのだ！



永田岳に近づく、山頂は狭かった

再び焼野三叉路、ここからの縦走路が宮之浦岳のハイライトと言われる位、何処までもヤクシマシャクナゲが咲き誇っている。



斜面に S 字状に咲き誇るヤクシマシャクナゲ



北側からの宮之浦岳

高度を下げて樹林帯に入るがここも多く咲いている。午後 5 時 10 分、新高塚小屋に着く。遅い時間となり

小屋は満室状態、何とか寝る場所を確保して簡単に夕食を取り眠る。

6月15日（曇り後晴れ）縄文杉～白谷雲水狭

朝食は取らずに5時半に出発、すぐに縄文杉に出会う。早い時間なので静かに対面出来た。引き続き夫婦杉、大王杉そしてウィルソン株に行く。400年ほど前に島津藩政時代に切り倒されたと言われるが、中に入り天井を見るとハート型に巨木と木々の葉を見る。しっかりと切り株の形を残している姿に感心する。



ウィルソン株、空を見ると巨木が見える！

この頃から荒川登山口からのハイカー、ガイドと修学旅行の生徒達が登ってくる。森林軌道跡を歩くが屋久杉の巨木が続く。楠川分れから辻峠に登り、バスの時間が迫ったが太鼓岩を往復、白谷雲水狭を見ながら高校時代を思い出すスピードで下り午後1時半着、45分発のバスに間に合う。



屋久島は何処にも巨木に出会う



縄文杉展望デッキ

6月16日（快晴）モッチョム岳

タクシーで千尋の滝の駐車場、滝に向かう途中でモッチョム岳の登山口がある。南側の海岸、尾之間から見る姿は天を突くような圧倒的な岩峰であるが登山ルートは北東の尾根、最初は急登で途中に樹齢3000年と言われるヤクスギ、万代杉が尾根の上に誇るように聳えている。辺りのツガやモミの木も大きく、花崗岩の岩山に頑張って根を下ろしている。山頂は丸い花崗岩、クラックに沿うように取り付けられたロープを使い、狭い山頂に立つ。



岩峰のクラックを登り山頂に立つ



後を振り返ると怖い！

岩の上で両手を挙げて立ち太平洋を見下ろすように写真を撮り、長い時間風景を楽しみ下る。登山口から車道を歩き、住宅の庭に咲くハイビスカスやマンゴーの木、ヤシの木、見知らぬ植物を見ながら原バス停に向かった。



神山小学校、子供たちは明るく挨拶する

6月17日（晴れ）太忠岳

ここもバスの便が悪く、タクシーを使い登山口のヤクスギランドに向かう。登山口からヤクスギや苔むした古い切り株の中を歩き3時間、樹林の間から突然姿を現した柱。太忠岳は山頂に天柱石と呼ぶ花崗岩の40M近い柱が立っていた。



天柱石、来たぞー！

テーブル状の花崗岩にその天柱石が乗るような姿、何時でも倒れそうな組み合わせ、斜め状のテーブルなのでそこで過ごすのを怖い思いをしながら、眼下の安房の町や種子島を見る。



安房の町と種子島

民宿の女将さんが安房港から天柱石が見えると言っていたのでバスを降りてから港に行き、遠くに小さくなった天柱石を見上げて宿に向かった。

6月18日（晴れ）宮之浦港～鹿児島港



天柱石、宮之浦岳と永田岳を見る

宮之浦港から鹿児島港南ふ頭までの4時間の船旅、海上保安庁に勤めていた泰正君から口永良部島、硫黄島、馬毛島や大きく横たわる種子島等、海の話聞く。山の中、阿武隈に住む私に取り「やっぱり日本は島国なのだ！」と実感する。竹島、硫黄島、黒島から成る三島村と屋久島から奄美大島の間にある吐噶喇列島の島々、十島村の役場が鹿児島市の港にあり、不思議だったが理解する事が出来た。



硫黄島と竹島

開聞岳が近づき錦江湾、右手に大隅半島の山々を見ながら、桜島と続き鹿児島南ふ頭に着く。



開聞岳が見えて来る！

6月19日（ガス、小雨）高千穂峰

高千穂河原から歩き出す。天気は回復傾向であったが、森林限界を越えたら四国沖の低気圧の関係で猛烈な風となる。時々砂やスコリヤが飛び、小雨交じりになりレインウェアを着込み登り続けるが、御鉢の外輪で登高を中止する。



御鉢の風に耐えて咲いている

麓に降り、登りの途中に下に見えた鹿ヶ原に行く。満開のミヤマキリシマの群落、霧の中で幻想的な風景を楽しむ。



鹿ヶ原のミヤマキリシマ



雨に濡れた花たち

鹿児島市内に戻る途中に、明治日本の産業革命遺産の一つである旧集成館を見学出来た。島津藩の産業革命、島津斉彬によって始められたアジア初の近代式西洋工場を学習する。

9 泊 10 日の長旅、最終日は鹿児島中央駅から博多乗り換え、東京経由で北上する。屋久島では狙い通りの好天続きでラッキーな日々だった。4 年前の 19 年に九州の山を歩いた時に韓国岳と一緒に登った高校山岳部の同輩の泰正君、その時は 52 年振りの山行だった。そして今回の屋久島の山歩き、きっと忘れる事の出来ない良い思い出でなるだろう。

2024 年 5 月 11～20 日の山旅